

京都市政史編さん通信

第37号
2010年3月

目次

奈良岡聰智「片岡直温と京都(二)」・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 山本篤史『京都市政史 第1巻 市政の形成』を拝読して・・・・・・・・・・7
 京わらべ・・8

片岡直温と京都(二)

奈良岡 聰智

第二章 政党政治家時代の京都との関わり

片岡直温は、一八八九年に日本生命創立に関わって以来、多くの企業経営に携わりつつ、政治家としてもキャリアを積んでいった。以下では、片岡の政治家としての活動を、選挙や政党支部との関わりを中心に検討し、彼が政党政治家としてどのように京都と関わったのかを明らかにしていきたい。

(一) 明治期

片岡が土佐の国民派という保守的な政治グループに属していたことは既に見た。日本生命創立後も、彼の政治意欲は変わらなかつたようで、第一回総選挙(一八九〇年)に際して、片岡は郷里の高知二区から国民派の候補者に推された(以後選挙結果については、表1も参照)。この時は落選したものの^{3,5)}、片岡は第二回総選挙(一八九二年)で再び郷里から立ち、初当選を果たしている(国民協会に所属)^{3,6)}。しかし、この総選挙の際に高知二区で大規模な干渉が行われたため(全国的にも品川弥二郎内相によって有名な「選挙大干渉」が行われた)、選挙後に当選無効を求める訴訟が起こされ、審理の結果、片岡の当選は無効となった。開票の際に選挙長らが不正を行い、片岡健吉(自由党)の票が片岡直温(国民派)に流された^{3,7)}と認定されたのである。

片岡は、政府とも民党(自由党)とも異なる政治的立場を目指していたものと思われる。片岡は、父が属していた土佐勤王党の直系という意識を持ち、国民派の一員として、自由党の急進的な民権思想に対抗しながら、

【表1】片岡直温の選挙結果一覧

総選挙(年)	選挙区	所属政党	結果
第1回(1890年)	高知2区	国民派	落選
第2回(1892年)	高知2区	国民協会	当選無効
第3回(1894年)	高知2区	国民協会	落選
第4回(1894年)	高知2区	国民協会	落選
第5回(1898年)	大阪2区	山下倶楽部	当選
第10回(1908年)	三重(郡部)	戊申倶楽部	当選
第11回(1912年)	高知(郡部)	戊申倶楽部	当選
第12回(1915年)	京都(郡部)	立憲同志会	当選
第13回(1917年)	京都(郡部)	憲政会	当選
第14回(1920年)	高知4区	憲政会	落選
第15回(1924年)	京都2区	憲政会	当選
第16回(1928年)	京都1区	立憲民政党	当選
第17回(1930年)	京都1区	立憲民政党	落選

〔註〕
 1. 『衆議院議員選挙の実績』(公明選挙連盟、1967年)に基づく。
 2. 所属政党は、当選後に所属したものを含む。

立憲君主政体を確立するという政治目標を持っていた^{3,8)}。しかし、この時の政府による選挙干渉があまりも度を超していたため、国民派は「吏党」の非りを受け、片岡も大きな政治的ダメージを蒙った。彼は以後二回連続で同選挙区において大差で落選し^{3,9)}、ついに第五回総選挙(一八九八年)では、選挙区を大阪二区に移した。この時は首尾良く当選したものの(山下倶楽部に所属)^{4,0)}、同年に再び行われた総選挙には立たず^{4,1)}、以後しばらく実業家としての活動に専心した。

片岡は、一九〇三年に日本生命社長に就任した他、関西鉄道、紀和鉄道の社長として、鉄道経営でも業績を挙げた。しかし、一九〇六年に鉄道国有法が成立したため、片岡は自ら育てた鉄道事業を手放す羽目になった。ここで政治に翻弄された経験が、片岡を再び政界に向かわせたようである。

一九〇八年、片岡は三重県郡部から代議士当選を果たすと^{4,2)}、仙石貢(元九州鉄道社長)、中野武宮(東京商業会議所会頭)らと共に戊申倶楽部を結成した(結成時の所属代議士は四二名)。同党は市部選出の代議士を中心に結成された政党で、財政の整理、国債の償還、産業の発達などを綱領に掲げていた^{4,3)}。片岡は同倶楽部の中軸として活躍し、政府に行政整理や鉄道経営の改善、鉄道代債公債の繰上交付などを求めた^{4,4)}。しかし、同党は小会派の域を脱することができず、政府に影響力を及ぼすことは難しかった。一九一〇年には解散

に追い込まれ、大同倶楽部と合流して中央倶楽部を組織するグループと、憲政本党と合流して立憲国民党を創立するグループへの分裂を余儀なくされた。片岡は、仙石と共に後者の中心的存在であり、国民党の創立委員、会計監督となった⁴⁵。

戊申倶楽部には、京都選出の西村治兵衛、木村省吾、中安信三郎、木村良の四代議員が在籍していたが、片岡と共に国民党に参加した者はいない（戊申倶楽部の解散後、西村は無所属となり間もなく死去。残る三名は中央倶楽部に参加）。片岡は、京都に本邸を持っていたものの、まだ京都政界とはほとんどつながりを持っていなかった。一九一二年の第一回総選挙に際しては、京都、大阪、三重、高知の四ヶ所から片岡に立候補を求め動きがあったが、片岡は京都や三重からの誘いは断り⁴⁶、郷里の高知県郡部から当選している⁴⁷。片岡が京都政界と本格的に関わりを持つのは、大正期に入ってからのことである⁴⁸。

（二）立憲同志会時代

一九一二年一二月、第三次桂太郎内閣が成立すると、大石正巳ら五領袖を中心とする国民党改革派グループは翌月に脱党し、桂新党への参加を決定した。非政友勢力を結集し、政友会に対抗する第二党を創設する動きが、いよいよ本格化したのである。片岡も、勇躍して桂新党に参加した。片岡は、五領袖には数えられなかったものの、大石、富田幸次郎、仙石貢（落選中）と共に、国民党の中軸をなす土佐派の一人として重きをなしており、新党の会計監督に就任した⁴⁹。

京都からは、前京都市長の川上親晴（第三次桂内閣で警視総監）の勧誘もあって、旧中央倶楽部の三代議員（中安信三郎、木村良、平井熊三郎）が桂新党に参加した⁵⁰。しかし、新党の幹部と連携しながら京都での組織作りを進めたのは、むしろ片岡であった。片岡は、一九一三年一月に加藤高明、大浦兼武、若槻礼次郎ら幹部が京都に来た際に、伏見の邸宅で午餐会を開き、京都市内で開催された演説会でも中心的役割を果たした⁵¹。翌月の立憲同志会結党式にも、京都を代表する一人として参加している⁵²。この頃片岡は、京都電気鉄道会社（京電）の相談役に就任し、都ホテルの経営再建に関わるなど、京都実業界で急速に存在感を増していた⁵³。立憲同志会の創立期は、片岡が政治家、実業家として飛躍する上で、大きな節目となる時期であったと言える。

一九一四年四月、第二次大隈重信内閣が成立し、同志会は与党となった。

片岡は政府の役職に就かなかったが、一二月に衆議院が解散されると、にわかには多忙になった。片岡は、早々に京都からの出馬を決定した⁵⁴。邸宅が伏見（紀伊郡）にあった関係で、郡部からの立候補であった。京都選挙区（郡部）は、定数五に対して、有力候補一名（片岡を含め前職五名、元職三名、新顔三名）が立つという激戦区であった。片岡は、同志会の山口俊一と共同で事務所を開設し、木津町で大正倶楽部という後援組織を作り、丹後で解散した国民党の支部を傘下に収めるなど、組織を重視した選挙戦を進めた⁵⁵。政策的には、経済通であることをアピールし、行財政整理を熱心に訴え⁵⁶、投票日近くには一週間に四〇回もの演説をこなしたという⁵⁷。こうして片岡は、第一二回総選挙（一九一五年三月投票）において、京都府郡部でトップ当選を果たした。他の当選者は、山口俊一（同志会）、川崎安之助、津原武（中正会）、野尻岩次郎（政友会）で、政友会の前職・奥繁三郎が落選するなど、非政友派の圧勝であった⁵⁸。京都市部（定数三）では、政友会が一議席も獲得できず、非政友派の優位は一層顕著であった。当選者は、加藤小太郎（同志会）、森田茂（中正会）、渡邊昭（国民党）の三人である。

総選挙後、片岡は同志会総務に就任した。京都では、府會議員選挙の指揮を取り、伏見町長候補の人選をめぐって調停を行うなど、同志会の党勢拡張に努めた⁵⁹。八月に大隈内閣の改造が行われた際、片岡は農商相や鉄道院総裁の候補として名前が挙げられた。しかし片岡は固辞し、外相を辞任した党首の加藤高明に従って党務に専念した⁶⁰。その後片岡は、加藤小太郎、山口俊一両代議員や側近の岸田勉（都ホテル常務取締役）と共に、同志会京都支部の開設準備を進め⁶¹、一九一六年五月にそれを実現させた。五月七日に三条の青年会館で行われた支部発会式では、一二〇〇余名の党員の参加を得て、加藤、若槻礼次郎、浜口雄幸、安達謙蔵ら最高幹部の臨席のもとで会則、決議や宣言が採択され、片岡が支部長に選任された。終了後は、片岡が経営する都ホテルで懇親会が行われた⁶²。このように、同志会京都支部の発足にあたって、片岡の貢献はきわめて大きかった。

同志会京都支部がこの時期に発足したのには、実は中央の政局が大きく関わっていた。この頃大隈内閣は、元老山県有朋から事実上不信感を突きつけられ、後継首相に加藤高明を推す大隈・同志会と、寺内正毅を推す山県の間で、激しいせめぎ合いが続いていた。大隈・同志会は、加藤内閣樹立と与党三党派（同志会、中正会、公友倶楽部）の合同を実現するため、会誌『同志』を創刊し、各地で地方支部を創立するなど、勢力拡張を図つ

ていた⁶³。同志会京都支部の発足は、まさにこの一環だったのである。

前述のように、京都では中正会が同志会と並ぶ勢力を持っており、両党の合同が大きな問題として残っていた。中正会は、第一次護憲運動後に政友会を脱党した尾崎行雄を中心に結成された政党で、京都の三代議士は尾崎に近い存在であった。当時尾崎は、新党で主導権を握るために加藤・同志会に対抗する動きを示しており、合同をめぐって、京都でも主導権争いが起こる可能性もあった。しかし、中正会所属の三代議士は目立った動きを見せることなく、一九一六年一〇月に憲政会創立に参加し⁶⁴、一二月までには中正会の府会組織も憲政会に合流した⁶⁵。

なお、京都の中正会の中心人物は、森田茂（一八七二～一九三二年）であった。森田は片岡と同じ高知県出身であるが、法律畑の出身（検事を経て弁護士開業）、地方政界での経験（高知県会議員、京都府会副議長）、政友会への在籍経験（第一次護憲運動後に尾崎行雄と共に脱党）など、キャリアの点では相違点が目立ち、ほとんど個人的親交もなかった。片岡が党創立時に総務に就任し、一九一八年からは顧問になったのに対し、森田は長らく党の主要役職に就かず（初の総務就任は一九二六年一月）、中央ではあまり存在感がなかった⁶⁶。しかし森田は、後に京都市長になっていることから分かるように⁶⁷、京都政界ではかなりの勢力を持っていた。この後両者は、異なる形で憲政会京都支部の中心となり、ライバルとして鎬を削っていくことになる。

このように、紆余曲折はあったものの、大正初期の国政における二大政党化の流れは、京都にダイレクトに及ぶことになった。片岡は、同志会（憲政会）幹部と連携してこの流れを促進した立役者であり、以後京都政界の重鎮として活躍していくことになる。

（三） 憲政会時代

一九一七年一月一七日、憲政会京都支部の発会式が開催された。前年一〇月に寺内内閣が成立し、衆議院の第一党である憲政会はそれを否認したため、まもなく衆議院の解散が予想されていた。憲政会京都支部も、寺内内閣を批判する決議を採択した。支部長には、片岡が引き続き選任された⁶⁸。

一月二五日、憲政会・国民党が内閣不信任案を提出すると、寺内内閣は衆議院を解散した。片岡は前回に引き続き京都府郡部から立候補し、早くから選挙戦を展開した⁶⁹。この第一三回総選挙で、憲政会は七六議席減という大敗を喫したが、片岡はトップ当選を果たした。憲政会京都支部は、

市部で一議席（森田茂）、郡部で三議席（片岡、川崎、山口）を確保し、地盤を確固たるものとした。

一九一八年九月、米騒動によって寺内内閣は倒れ、原敬内閣が成立した。憲政会は、創立後しばらく党勢不振が続いていたが、原内閣の成立によって活気を取り戻し、以後原内閣・政友会と政策論争を繰り広げた。こうした中で、片岡は一九一九年二月に日本生命社長を辞任した。片岡自身の説明によれば、日本生命の創立以来三〇年が経過し、もう何の顧慮も要らなくなったので、「年来の宿志」を実行するため、予定通りに行ったことであった⁷⁰。「年来の宿志」とは、「三度の飯よりも好きな」政治に集中することであった⁷¹。片岡は、いわゆる党人派とは疎遠で、普選問題や青年運動とは距離を取っていた。しかし、第一次大戦後の社会変動には敏感であり、「資本家と労働者の中間に立つて公平なる第三者」として、労働問題を中心とする社会問題を解決しなければならぬと考えていた⁷²。以後片岡は、日本生命時代の経験を生かしつつ、経済問題、社会問題を自らの政策課題として位置づけ、江木翼ら幹部と協調しながら、積極的に意見を公表していった⁷³。

一九二〇年、原内閣は衆議院を解散し、第一四回総選挙が行われた。前年に衆議院議員選挙法が改正され、小選挙区制が導入されており、この時の選挙では、初めてそれが施行されることになった。従来片岡は南山城、丹後を地盤にしてきたが、小選挙区の区割りには片岡に不利だったようである⁷⁴。そこで片岡は、京都二区（下京区）または三区（紀伊郡など）からの立候補を模索したが、二区からは現職衆議院議長の奥繁三郎（政友会）や鷺野米太郎（京都市助役）、松風嘉定（実業家）が立候補するという見込みが報じられ、三区からは地元出身で元通信次官の中谷弘吉（日本染料会社社長）を擁立する動きが憲政会内にあった⁷⁵。京都からの立候補に不安を感じた片岡は、いったん二区からの公認候補に決定したにもかかわらず、それを振り切って郷里の高知四区から立候補することにした。しかし、片岡は京都で憲政会候補を応援する活動も行ったため、自らの選挙活動に十分力を注げなかったようである⁷⁶。結果的に、片岡は政友会の対立候補に大差で敗れることになった⁷⁷。京都二区では、奥村安太郎（憲政会）と渡邊昭（国民党）が当選しており、片岡が当初の予定通り立候補していれば、当選していた可能性が高い。『京都日出新聞』はこの経緯を振り返り、片岡の行動を「同氏の為、憲政会の為、惜しまれる」と評した⁷⁸。

片岡は、落選中も京都市会選挙で憲政会系候補を支援し、伏見町長選挙

で調停を行うなど、積極的に政治活動を行った⁷⁹。現実的な話にはならなかったものの、京都市長候補として名前が挙がったこともある⁸⁰。しかし、片岡は森田茂とは違って、京都府会議員や市会議員を兼任していた訳ではなく、子飼いの地方議員もいなかったように、地方政界への影響力は限定的であった。加えて、片岡と森田は犬猿の仲になっており、両者の連携は不可能であった⁸¹。落選中の片岡は、目立った仕事ができず、政策研究に力を入れることにした⁸²。

一九二四年一月、貴族院を基礎とする清浦奎吾内閣が成立すると、それに反発した政友会、憲政会、革新倶楽部によって護憲三派が結成され、第二次護憲運動が起こった。憲政会京都支部では、一月一日に支部大会を開き、清浦内閣倒閣を決議した。片岡はこの大会で、支部長を川崎安之助に譲ったが、引き続き支部運営には積極的に関わった⁸³。一月三十一日に衆議院が解散されると、片岡は憲政会の公認候補選定を進め、自らは早々に第二区からの立候補を決めた⁸⁴。片岡にとっては、初めての京都市部からの出馬であったが、護憲運動という追い風の中、豊富な資金力もあって無難に選挙戦を進め⁸⁵、五月の第一四回総選挙で無事トップ当選を果たした⁸⁶。片岡は当選後、産業政策や貿易振興に対する意欲を語っている⁸⁷。

この総選挙で憲政会は第一党に躍進し、第一次加藤高明内閣（護憲三派内閣）が成立した。片岡は入閣からは漏れ、八月に政務次官が新設されると、内務政務次官への就任を要請された。片岡は、今さら政務次官では役不足だと感じ、就任に消極的であった⁸⁸。兄直輝をはじめ周囲も就任に反対で、憲政会京都支部では、「党の領袖」を政務次官に就けるのは「政党的軽視」であるという批判の聲が上がっていた⁸⁹。しかし、加藤首相は政務次官に大物を就けて、政務官制度を強化する意向を持っており、片岡は結局就任を受諾した⁹⁰。片岡は内務政務次官として、普通選挙法や社会政策立法の実現に関わった。

翌年八月に護憲三派が決裂し、第二次加藤内閣が成立すると、片岡は商工相に起用された。片岡は、実業界出身の大臣として産業政策に力を注ぎ、鉄鋼業界の合同や関税問題の解決でリーダーシップを発揮した⁹¹。次いで、一九二六年に第一次若槻礼次郎内閣が成立すると、片岡は浜口雄幸（内相に転任）の後任として蔵相に就任した。片岡は、近い将来に金解禁を実現するため、金融制度改革や震災手形問題の解決に取り組んだ。同時に、議会運営を安定化させるため、憲政会と政友本党の提携を図った。しかし、憲政会、政友会、政友本党が駆け引きを繰り返した結果、一九二七年一二

月開幕の第五二議会は大荒れとなり、騒然とした政治状況の中で、片岡蔵相は「失言」によって金融恐慌発生のきっかけを作るという失態を演じた（はじめに）。金融恐慌によって若槻内閣は倒れ、片岡の蔵相在任はわずか半年ほどで終わった。

（四）立憲民政党時代

片岡蔵相の「失言」問題は、当時から新聞で大々的に報道され、片岡の政治生活にとって致命傷となった。しかし片岡は、以後も重鎮として政党活動を続けていった。

若槻内閣が総辞職すると、政友会を与党とする田中義一内閣が成立した。野党に転落した憲政会は、政友本党と合同して立憲民政党を創立した⁹²。京都では政友本党がほとんど勢力を持っていなかったため（所属代議士は皆無）、京都支部の再編は大きな問題にならなかった。一九二八年七月二日、床次竹二郎顧問、片岡前蔵相、森田茂衆議院議長らが参加して、京都市公会堂で京都支部の発会式が行われた。支部長には、引き続き川崎安之助が選任された⁹³。

一九二九年一月、田中内閣は衆議院を解散し、初の普通選挙となる第一六回総選挙が実施された⁹⁴。この選挙では、中選挙区制度が初めて導入されたが、片岡は前回に引き続き京都市部（京都一区）から立候補した（定数五）⁹⁵。民政党は、前職の片岡、森田という大物二人に加え、市議の西村金三郎（同志社理事）を公認し、三議席の獲得を目指した。ところが、この決定に不服だった中村三之丞（前片岡蔵相秘書官）が、除名処分を受けながらも立候補を強行したため、民政党の候補者は四名になった⁹⁶。前職からは、小会派の田崎信蔵（革新党）、鷺野米太郎（実業同志会）、新人からは、無産政党の水谷長三郎（労農党）、吉川末次郎（社会民衆党）、さらには、無産政党に対抗すると称して、立憲国粋会代表の杉村勇次郎（陸軍少将）ら三人の右翼系の候補も出馬したため、京都一区は、五議席をめぐって一九人が争うという、全国でも有数の激戦区となった。投票の結果、民政党は片岡、森田を当選させたものの、残る二人は相討ちとなり二議席にとどまった⁹⁷。片岡はトップ当選を果たし、意気盛んであったが⁹⁸、自らの前秘書官の立候補を止めることができなかったという点では、政治力にやや陰りが見えてきたとも言えた。

一九二九年七月、浜口雄幸内閣が成立し、民政党は与党になった。片岡は満鉄総裁の候補として名前が挙がったが、蔵相在任時の経緯から不安視

する声が強かったようで、実現しなかった。⁹⁹ 満鉄総裁には、片岡と同郷で長年政治行動を共にしてきた仙石貢が就任した。片岡はこの人事に不満で、若槻元首相や安達内相が片岡を直接訪問して慰撫したらしい¹⁰⁰。

浜口内閣は翌年一月に衆議院を解散し、二月に第一七回総選挙が行われた。片岡は京都一区から出馬したが、激戦は相変わらずで、定数五に対して二人が立候補した。また、民政党では前回に引き続き候補者調整が難航し、四人の候補者が立つという事態が再演された。地元出身の安田耕之助（元京都市長）が出馬したこともあって、片岡は大きく票を減らすことになり、惜しくも一三〇票の僅差で落選した（民政党からは安田、西村、森田の三人が当選）¹⁰¹。片岡は「おれは代議士にならないでも、おれ一個人の力で民政内閣に対しどんな無理な注文でもすることが出来る。落選したからとて片岡が直に老ぼれるわけでもあるまい」と強気な姿勢を見せたが、政治力の衰えは隠すことができなかった¹⁰²。片岡は同年四月に貴族院勅選議員に任命され、政界の第一線から半ば引く形となった。

もつとも、政治との関わりが無くなった訳では決してない。一九三〇年九月、民政党京都支部長の川崎安之助代議士（一八六三〜一九三〇年）が死去した。川崎は、大山崎村長、京都府会議員などを経て国政に進出した人物で、民政党京都支部で片岡派、森田派の闘争が表面化しなかったのは、謹厳な彼が支部長として暗に統制していたからだと言われている¹⁰³。その意味で、彼の死は民政党にとって大きな打撃で、後任が問題となった。候補としては津原武、安田耕之助が挙げられたものの、いずれも決め手を欠き、結局後任には片岡が再登板することになった¹⁰⁴。もつとも、就任後間もなく片岡と森田派の対立が報じられ¹⁰⁵、一九三三年に病によって退任の意向を表明してから長らく後任を決定できないなど¹⁰⁶、往年のように強いリーダーシップを発揮できる状況ではなかった。

その後片岡は、第二次若槻内閣の下で臨時行政財政審議会委員に、齋藤実内閣の下で交通審議会委員に選任されたが、一九三三年五月に妻が亡くなってからは健康が勝れない状態が続いた。片岡は、この年一月に『回顧録』を公刊し、引き続きその続編の著述に精力を傾けていたが¹⁰⁷、秋から容態が悪化し、一九三四年五月、荒神口の別邸で死去した。享年七四才であった。

片岡が死去すると、若槻元首相は、憲政会時代の片岡の苦心や功績は、今日では自分が一番良く知っていると言語り、往時の貢献を讃えた。田中祐四郎代議士（民政党京都支部長）も、「京都では片岡の民政〔党〕か民政〔党〕

の片岡かという程極めて深い関係にあり」と振り返った¹⁰⁸。ここまで見てきたところからも明らかのように、京都において同志会から民政党に至る第二党が発展する上で、片岡はきわめて大きな貢献をした。満州事変以降に政党政治が崩壊し、民政党が分裂する中でも、片岡は政党政治を擁護する立場を取り、民政党を支えた¹⁰⁹。片岡直温は、政党政治家として、一貫した政治姿勢を全うしたと言えよう。
〔以下、次号に続く。〕

註

³⁵ 選挙結果は以下の通り。林有造（自由倶楽部）一、三三三票（当選）、片岡健吉（自由倶楽部）一、二九七票（当選）、弘田正郎（国民自由党）八五六票（落選）、片岡直温（国民自由党）八三〇票（落選）。得票数は、『衆議院議員選挙の実績』（公明選挙連盟、一九六七年）に基づく（以下も同様）。

³⁶ 選挙結果は以下の通り。片岡直温（国民派）八五四票（当選）、安岡雄吉（国民派）八四四票（当選）、片岡健吉（自由党）七九七票（落選）、林有造（自由党）七三三票（落選）。

³⁷ 片岡直温『大正昭和政治史の一断面』西川百子居文庫、一九三四年、七四二〜七四五頁、川田瑞穂『片岡健吉先生伝』（湖北社、一九七八年）六〇八〜六五七頁、『読売新聞』一九九二年四月一日、五月二日、四日、六月一日、一月三日、一九九三年四月七日。

³⁸ 片岡直温『回顧録』（百子居文庫、一九三三年）六二〜二頁。

³⁹ 第三回、第四回総選挙共に、林有造、片岡健吉（いずれも自由党）が当選している。

⁴⁰ 選挙結果は以下の通り。片岡直温（無所属）四二〇票（当選）、菊池侃（自由党）三〇六票（落選）。

⁴¹ 『大阪毎日新聞』一八九八年六月一日、三〇日、八月一日。

⁴² 定数七のうち、上位当選者四名は以下の通り。栗原亮一（政友会）六五九八票、片岡直温（無所属）五六〇〇票、尾崎行雄（猶興会）五二一六票、浜田国松（猶興会）四四二四票。片岡は、参宮鉄道社長として三重県に地盤を持っていた他、同郷の大石正巳（憲政本党、三重県から二回代議士に当選経験あり。この時は高知県から当選）の支持基盤も引き継いだらしい（『読売新聞』一九〇八年五月五日）。

⁴³ 『読売新聞』一九〇八年七月二六日。

⁴⁴ 『読売新聞』一九〇九年一月二七日、二八日、四月六日。

⁴⁵ 時任英人『大養毅』（論創社、一九九一年）五二〜五五頁、『読売新聞』一九一〇年三月七日。

⁴⁶ 『京都日出新聞』一九一二年二月二八日、四月六日、八月一日、四日、一九日。

⁴⁷ 当選者五名は以下の通り。片岡直温（国民派）二七四八票、白石直治（政友会）二六六七票、富田幸次郎（国民党）二二九六票、大石正巳（国民党）二二二二票、岡田栄（政友会）二二〇九票。

⁴⁸ ただし、一九一〇年一〇月の衆議院議員補欠選挙対策で河野広中（国民党）と連絡を取り合い、

第一回総選挙に際しては、清水仁三郎（国民党）の応援演説のため宮津に赴くなど、明治末期から一定の関わりは確認できる（一九一二年九月二日付河野広中宛片岡直温書翰「河野広中」

書」国立国会図書館憲政資料室所蔵『立憲同志会資料集』一九一二年五月三日）。

⁴⁹ 『会務概報』（櫻井良樹編『立憲同志会資料集』四巻、柏書房、一九九一年）。

⁵⁰ 『京都日出新聞』一九一三年二月二日、三月八日。

⁵¹ 『京都日出新聞』一九一三年一月九〜二日。

⁵² 『京都日出新聞』一九一三年二月二五日。

⁵³ 片岡直温『京都発展策』（『京都日出新聞』一九一三年二月五〜七日）は、当時の彼の抱負をよく示している。

⁵⁴ 『京都日出新聞』一九一五年一月一〇日、一一日。

- 55 『京都日出新聞』一九一五年一月五日、二〇日、二三日、二月六日、三月一日。
- 56 『片岡氏の政見』(『京都日出新聞』一九一五年二月六日、九日)。
- 57 『京都日出新聞』一九一五年三月二七日(片岡直温談)。
- 58 当選者は、以下の通り。片岡直温(同志会) 四四五八一票、川崎安之助(中正会) 三三三三票、山口俊一(同志会) 三二六八票、津原武(中正会) 二九三九票、野尻岩次郎(政友会) 二八七二票。なお、落選者の一人には与謝野鉄幹(晶子の夫) がいた。
- 59 『京都日出新聞』一九一五年八月三日、一六日、二七日、二九、一九一六年五月二六日。
- 60 回顧録によれば、片岡は加藤から農商相就任を打診されたが、断つたという(前掲、片岡直温『大正昭和政史の一断面』二一〇〜二二二頁)。新聞紙上では、仙石貢鉄道院総裁の後任に推されたが、固辞したと報じられていた(『読売新聞』一九一五年八月二三日、一四日)。
- 61 『京都日出新聞』一九一六年三月二二日、四月一〇日、二二日。
- 62 『東京日日新聞』一九一六年五月八日、『京都日出新聞』同年五月七、九日、八月七日。
- 63 拙著『加藤高明と政党史』(山川出版社、二〇〇六年) 一七二〜一七六頁、拙稿『憲政会と機関誌『憲政』(憲政公論)』(復刻版『憲政/憲政公論』解説、柏書房、二〇一〇年)。
- 64 ただし、川崎、津原両代議士の入党は少し遅れたらしい(『京都日出新聞』一九一六年一〇月一九日)。
- 65 『京都日出新聞』一九一六年一〇月一八日、二二、二六日。
- 66 前掲 拙著『加藤高明と政党史』四三八〜四三九頁。
- 67 森田市政については、『京都市政史』(京都市、二〇〇九年) を参照。
- 68 『京都日出新聞』一九一七年一月一八日。
- 69 『京都日出新聞』一九一七年二月一日、二日、八日、一三日、三月五日、一九日、二四日、四月二日、二二日。
- 70 『東京日日新聞』一九一九年一月一日(片岡直温談)。
- 71 前掲 片岡直温『回顧録』二六九〜二七〇頁。
- 72 前掲 『東京日日新聞』一九一九年一月一日(片岡直温談)。
- 73 片岡直温『原内閣施策の方針に対する質問』(『憲政』二巻二号、一九一九年二月)、当面的問題(『憲政』二巻五号、一九一九年七月)、同『国民思想の動揺』(『憲政』六巻五号、一九二三年五月)、同『経済組織の改革』(片岡直温、一九二二年)、片岡直温・江木翼『疾病保険法案立説明』(片岡直温・江木翼、一九二〇年) など。
- 74 『京都日出新聞』一九二〇年二月二九日、三月一日。
- 75 『京都日出新聞』一九二〇年三月一日、二日、二二日、二五日、三月三〇日、三二日、四月一日、三日。
- 76 『京都日出新聞』一九二〇年四月七日、一一日、一六日
- 77 選挙結果は以下の通り。国沢新兵衛(政友会) 三四二五票(当選)、片岡直温(憲政会) 二二八七票(落選)。
- 78 『京都日出新聞』一九二〇年五月一四日。
- 79 『京都日出新聞』一九二二年五月九日、一三日。
- 80 『京都日出新聞』一九二二年六月二三日。
- 81 田中祐四郎(代議士、民政党京都支部長) は、両者の関係について、以下のように振り返っている。「森田君は『中略』片岡直温君とは同郷人であり乍ら、別に意見が対立という訳でもなかつたが其処に森田派、片岡派といふが如き暗流が生ずるに至つた。」(相馬由也『大野人森田茂』川橋豊治郎、一九三六年、一六二〜一六四頁)。
- 82 前掲、片岡直温『大正昭和政史の一断面』三二〇〜三三九頁。
- 83 『京都日出新聞』一九二四年一月一日。
- 84 『京都日出新聞』一九二四年二月一日、四日、九日夕刊。なお京都五区からは、養嗣子の安が

- 立候補し、落選している。
- 85 片岡は憲政会のためにかなりの資金を提供していたようで、『京都日出新聞』では、この時の総選挙費用として一〇万円を提供したと報じられている(『京都日出新聞』一九二四年三月三日)。ちなみに同記事によれば、加藤高明総裁は六〇万円、若槻礼次郎は一〇万円とされている。
- 86 選挙結果は以下の通り。片岡直温(憲政会) 五七七八票(当選)、田崎信蔵(革新倶楽部) 二八九一票(当選)。
- 87 『京都日出新聞』一九二四年五月九日(片岡直温談)。
- 88 『京都日出新聞』一九二四年八月八日(片岡直温談)。
- 89 前掲、片岡直温『大正昭和政史の一断面』三六二〜三六四頁、『京都日出新聞』一九二四年八月九日。
- 90 政務次官制度の創設については、前掲、拙著『加藤高明と政党史』二八二〜二九四頁。
- 91 前掲、片岡直温『大正昭和政史の一断面』三六五〜四五四頁。
- 92 拙稿『立憲民政党の創立』(『法字論叢』一六〇巻五・六号、二〇〇七年三月)。
- 93 『京都日出新聞』一九二八年七月三日。
- 94 第一回普通選挙については、拙稿『第一回普通選挙』(筒井清忠編『解明・昭和史―東京裁判までの道』朝日選書、近刊)。
- 95 第一回普通と京都の関わりについては、京都市編『京都の歴史』九を参照。
- 96 『京都日出新聞』一九二八年二月二日、三日。
- 97 選挙結果は以下の通り。片岡直温(民政党) 一七五〇七票(当選)、森田茂(民政党) 一三二五八票(当選)、田崎信蔵(革新党) 九〇三六票(当選)、水谷長三郎(労働党) 八二二七票(当選)、鈴木吉之助(政友会) 八二二七票。
- 98 『京都日出新聞』一九二八年二月二日(片岡直温談)。
- 99 『東京朝日新聞』一九二九年七月三日、十日、八月四日、八日。
- 100 『東京朝日新聞』一九二九年八月三日。
- 101 選挙結果は以下の通り。安田耕之助(民政党) 二二五二九票(当選)、西村金三郎(民政党) 一七二〇〇票(当選)、鷲野米太郎(国民同志会) 一〇四三三票(当選)、鈴木吉之助(政友会) 九四八四票(当選)、森田茂(民政党) 八七六八票、片岡直温(民政党) 八六三八票(落選)、河上肇(労働党) 七二五五票(落選)。
- 102 『東京朝日新聞』一九三〇年二月二日。
- 103 『京都日出新聞』一九三〇年九月二日、一三日。
- 104 『京都日出新聞』一九三〇年九月九日、一五日、一七日。
- 105 『京都日出新聞』一九三〇年一月一八日。なお、一九三二年一月には、森田が市長在任中に死去している。
- 106 『京都日出新聞』一九三三年一月一三日。後任支部長には、一九三四年一月に田中祐四郎代議士が就任した(『京都日出新聞』一九三四年一月七日、一七日)。
- 107 前掲、片岡直温『回顧録』前掲、片岡直温『大正昭和政史の一断面』七三九頁、後記。
- 108 『京都日出新聞』一九三四年五月二日(若槻礼次郎談、田中祐四郎談)。片岡は死去と同時に、勲一等瑞宝章を授与された(『東京朝日新聞』一九三四年五月二日)。これは、若槻の運動によるところもあつたようである(ただし若槻は正四位から従三位への昇叙も求めたが、これは実現しなかつた。一九三三年一月二七日付齋藤実宛若槻礼次郎書翰「齋藤実文書」国立国会図書館憲政資料室所蔵)。
- 109 一九三二年に安達謙蔵が民政党を脱党し、翌年に国民同盟を結成した際、民政党京都支部の切り崩しに動いたが、京都支部は片岡を中心に結束を維持したため、参加代議士を出さなかつた(『京都日出新聞』一九三三年一月九日)。また、片岡と国粋主義系団体や政党史批判との関わりは確認できず、この点で、中央倶楽部から同志会に参加した京都選出の代議士・中安信三郎(大日本国粋会会長) などとは、対照的である(『中安信三郎追悼録』大村菊太郎、一九三三年)。

『京都市政史』 第1巻

市政の形成』を拝読して

総合企画局政策企画室 山本篤史

1 はじめに

この度、「京都市政史編さん通信」に登壇させていただくことになりました。十五年くらい前、職場で回覧された号を読んで感銘を受け、バックナンバーをお願いして以来、手元にお送りいただいていることがきっかけでお声掛けいただきました。光栄です。

昨年三月末に発行されました『京都市政史 第1巻 市政の形成』の「書評」をお受けしたのですが、先ず、「京都市政史編さん通信」(以前は「市政史編さんだより」でした。)を読み続けて感じたことやこれまでであったこと。そのあとに「京都市政史」を拝読して感じたことを書き綴ってまいりたいと思います。

2 「京都市政史編さん通信」と私

私が初めて「市政史編さんだより」を読んだころ、大阪市立大学の西大助教授(当時)の「京都南進論」(第七号)第十号、一九九五年一月〜十月)が連載されておりました。その言葉とおりの市域拡大についてののみでなく、三大問題(建都千百年記念祭、第四回内国勸業博覧会、京都・舞鶴間鉄道敷設)、市制特例、二大事業、そして、戦後の京都国際文化観光都市建設法制定、財政再建団体指定、保存と開発の調和など、東京遷都によって深い傷を負った本市の歩みを知ることができました。また、歴代市長の市会発言録から、その時代背景と市長の熱い思いを感じ取ることができました。

このことは、他の自治体に数年勤めたあとと本市に入庁した私にとつて大変貴重な知識となり、生まれ育った京都への愛着が深いものになりました。同時に、本市の職員としてこの歩みをさらに昇華させて次代につないでい

かなければならない自負のような気持ち芽生えるきっかけとなりました。特に、内貴甚三郎初代市長が一九〇〇年(明治三十三年)六月の本会議で述べられた京都の未来像とも言える「東方ハ風致保存ノ必要アリテ：西方ハ現在田畑ニテ別ニ風致上ノ関係ナキニヨリ、烟突林立スルモ何等差支ヲ見ズ。」は、内貴市長の並々ならぬ気概を感じます。なかでも、「烟突林立スルモ何等差支ヲ見ズ」のくだりは、当時宅地開発の許認可に携わっていた

私にとつては、林立する煙突からもうもうとけむりをはく京都の姿など考えられず大胆なものに思えました。

このころ思い出したことがあります。幼少のころ、今は亡き明治生まれの祖母が「天皇さんは、東京に行つてはるだけやねん。いつか京都に帰つてきはる。」と言つてくれたこと。そのことを友人に話すと「おんなじこと言うてたで。おじいさんが。」ということがあります。本気で信じていたのかどうか定かではありませんが、遷都はそのころを生きた京都市民にとつて、子に話し、孫にも語つて聞かせるほどに大きなできごとで、今となつても深い思いのあることと言えるのではないのでしょうか。

南禅寺水路閣、哲学の道、インクラインなど貴重な観光資源であり、国内外から多くのお客様が訪れる琵琶湖疏水について、福沢諭吉が古都の景観を破壊する事業であるとして反対されていたことを知りました。確かにお寺の境内に水道橋を建設するとは、大胆極まりないことです。里山の風景も掘削によつて変貌したことでしょう。しかし、今日の京都の繁栄にとつて、琵琶湖疏水は欠かせない社会資本です。

私は土木の技術職員です。このことを知った当時、「事業を始めるに当たつて逆風が吹いても、いずれは多くの方々に受け容れられる仕事があったい。いや、受け容れられるよう尽くさなければならぬ。」と感じました。この思いに至つたお陰で、地元の方々から頂いた言葉を追い風、期待と感じ取ることができました。街路事業の用地取得のため、同僚とともに交渉に当たつたとき。河川事業で控訴人でもある地権者と会つたとき。地元説明会の夜に頂いた言葉、現場を歩いていて流域に住む方々から頂いた言葉……。どれも私にとつてはすべて追い風でした。段々話がズレてきてしまいました。戻しますが、編さん通信に名が載っている先輩は高名な方々ばかりですが、私のような実務レベルの先輩方の存在も感じながら読んでおりました。『京都市政史』もまた先輩職員の息吹を十分感じられる内容となっております。

3 『京都市政史』を拝読して

この「第1巻 市政の形成」は、全五巻のうち三回目の刊行となるものです。刊行計画が編さん通信に掲載されたときから、待ち遠しく思つておりました。それは、京都市の黎明期を描写した巻であるからです。手にとつてみますと本編が七〇〇頁余にもなり、ボリューム的にちよつと引いてしましますが、中身はたいへん読みやすく工夫がされています。

先ず、写真が多く載せられており、先輩方の姿やまらの様子を浮かべながら読み進めることができます。そして、とても親切なことには読み方が指南され、併せて、本書の構成がマトリックス図で示されていますので、興味のある時期の行政分野を特定して読むことができます。

構成は、明治維新から第二次大戦の敗戦後までを六つに分けて章立て(「横軸」)され、「地方制度の変遷」、「市民との関係」、「社会福祉」、「都市整備」など十三のテーマが設定(「縦軸」)されており。

私は指南どおりに、総説的なテーマ「時代の流れ」を通読して、明治維新期から敗戦後までの近代京都の歴史を概観したうえで、「都市整備」を通読しました。それぞれの時期に活躍された先輩方が、懸命になって課題に取り組まれる姿を感じ、熱い思いに駆られることもありました。特に、都市計画京都地方委員会を舞台にして繰り広げられた、木屋町通拡築か河原町通拡築かの大論争は迫真の描写です。また、風致地区指定への取り組みや永田兵三郎土木局長と市村光恵京大教授(のちに市長)による東山の景観をめぐる論争など、本市の「風致・景観取組始め」についても詳しく述べられております。

本書を読み終えて感じますことは、本市は遷都に至っても色々な分野で発展する可能性を秘めていたこと、福祉・文化・教育・医療・観光など広い分野に取り組み、そして現在、多様な特性を持つ都市となっていることです。環境、文化芸術、大学、宗教、教育、国際、観光、ものづくり都市……。ちよつと感じ入り過ぎではないかという向きもあるかと思いますが、このような発展の原点(きっかけ)は、一八九〇年(明治二十二年)二月八日の「北垣国道の談話」にあるのではないかと思います。これは、北垣知事が市会議員・市参事会員・上下京両区長・府職員幹部を招いて、今後の京都市政について意見を述べられたものです。北垣知事は「市政自治前途の事業」として具体的な政策課題として十項目掲げられており、本書で最も読んでいただきたい部分です。

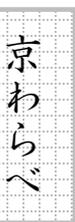
このほか、個人的には編さん通信を読んで感じたことと対比して読めたことが良かったです。内貴甚三郎初代市長の姿は、想像していたのとは違い、若々しく凛々しい姿でした。また、先輩職員の執務室や現場での写真が載せられております。皆さん活き活きとした姿です。そして何より、私の祖父母世代が言っていたことが本当であったこと。「天皇は東京へ行幸されたまま、そこへ居住されてしまった。」このことを知ったことが何より嬉しく思います。

4 おわりに

本書には、東京遷都後の京都の衰退は相当激しく、その後の取組によって没落を食い止め、百万都市として発展した過程が描かれています。今後、土木技術職員として果たしていかなければならない役割を感じましたことを記して締めくくりたいと思います。

近年、社会資本の高齢化が問題となっております。本書に記載の、コレラや赤痢等の伝染病から市民を解放した上下水道、三大事業の道路拡築で一九一三年(大正二)に完成した七条大橋、都市の美観と道路の保全のため植えられた街路樹など、本市の発展を支えてきたこれらの社会資本も例外ではありません。健全な社会資本があつてこそ地域社会の発展が期待できるものと考えます。これらの社会資本を次代につないでいくことが今を生きる我々が果たさなければならぬ使命と感じました。

ここまで長々と書いてまいりました。日ごろの業務をこなしておりますと、時に埋没してしまいそうなおことがあります。しかし、携わっている業務の原点を知っていれば、意気を感じて携われるものと思います。この「第1巻 市政の形成」には、本市行政のすべての分野の原点が描かれております。この本をお薦め致します。



◇新型インフルエンザはピークを過ぎたといわれていますが、最近ではノロウイルスが流行っています。今年度は、公共施設の玄関などに、消毒液が置かれる光景が普通にみられるようになりました。

◇今号には、総合企画局政策企画室の山本篤史氏より、昨年三月刊行の『京都市政史 第1巻 市政の形成』の書評をご寄稿いただきました。次号でもこれまでにお寄せいただいた書評を掲載する予定です。

◇巻頭の奈良岡論文は、三回連載の第二回目です。片岡直温は、大蔵大臣在任中の一九二七年(昭和二)に、震災手形善後処理法案をめぐる審議に際しての失言が、金融恐慌の引き金となったことで知られています。京都にもたいへん縁の深い人物であったことがうかがえます。ぜひ、御味読ください。(秋)

発行日 二〇一〇年三月二十日
発行 京都市市政史編さん委員会
所在地 京都市上京区寺町通丸太町上る
京都市歴史資料館内
電話 〇七五(二四一) 四三二二